

今私が 影響を受けるべき一冊



堀田耕介

今私が影響を受けるべき一冊…

白洲正子『名人は危うきに遊ぶ』

堀田耕介

九〇年代の末、当時四〇歳近くなっていた私にとって、読書の一つの転回点になり、今に至る読書という営為の再出発点になったのが、白洲正子『名人は危うきに遊ぶ』に出会ったことだった。出会ったのは神田の古本屋の店頭。一読してすぐに買い、一気に読んだ。それから何十冊となく白洲の本は読んだけれども、

「人」や「もの」、「こと」に対する小気味よい評価の仕方がとても魅力的で、そのペース、そのリズムを味わいたくていろいろな本を読んだ。もちろん書かれている世界、あまり取り上げられない伝承の人物や驚くような味わいのある「もの」たち、今の常識では考えられないような不思議な含蓄のある生き方をした人たちを描き出す、その内容ももちろん魅力的ではあるのだけど、それらの魅力もまた白洲の筆で書かれるからこそ近しく感じられたのだろうと

思う。特に西行と明恵はもう白洲の目を通して描かれた人物像だけが正しいと思えてしまっている。

当時の私は五年間の結婚生活と十年間の高校教師の仕事に終止符を打って、自分の人生と仕事をどのように立て直すのかについて考えながら、痛めつけられたからだと心のリハビリに取り組んでいた。その頃の私の心に白洲の言葉は本当に素直に入ってきて、私は詩を書いたりエッセイを書いたりしながらその日そ

の日を送っていた。白洲に触発されて木の花の名前を覚え、それでもどこからともなくやってくる哀しみで、空の青さに涙したりしていた。

私が元気を取り戻せたのは、少なからず白洲の文章のおかげだったのではないかと今では思う。白洲の文章には確固とした世界があり、読んでいる自分もそのしっかりした大地に足をつけて立っている気持ちになれる。自分が日本人であることや、自分が日本に生きていることの意味を再確認できる。そうやって現実との

回路が回復できたことが、自分が仕事に復帰する上で大きかったように思う。

少しずつ仕事を再開しながら他の本も読んで行ったが、一つの本で一つの充足した世界をつくっている、そうした本にはなかなか出会えない。何か欠けたものがある、欠落したものがあるというのが現代の事物の一つの特徴であるのだとしたら、白洲のように読んでいるこちらを満ち足りさせてくれる、そういう文章は現代的ではないのかもしれないとも思う。

今の私は村上春樹をはじめ、そうした欠落を抱えた多くの作品に魅かれてはいるが、ある意味これ以上ない完全無欠な世界を描き出す白洲正子の作品の魅力は、改めて意識せざるを得ない。白洲が描き出す人々は恵まれた人生を送っているとは限らない人たちだが、人生を揺るぎなく生きている人たちであって、それが醸し出すその人ならではの人間性の魅力があり、決して飽きるということがない。そうした人々のことを『名人』と白洲は呼んでいる

のだろう。それはある意味神々の世界なのかもしれない。しかし私のような人間もまた、そうした神々の世界で生きることまでできるのではないかと思わせてくれる、そんな元気と勇気を与えてくれる、ところが白洲の作品にはある。

白洲の作品が人生に与える影響は、どんなところにあるのだろうか。こんなふうに考えてみた。

人はいろいろな運命に出会ったときに、なぜ自分がこんな目に会うのだろう、と考えてしま

う。それは小さいころに読んだ物語、あるいは教育の影響で、よい心をもつ人は幸せになり、よくない心をもつ人はそうはなれない、と考えてしまうところがどこかにある。だから納得できない運命に出会ったとき、これは自分の心に良くないところがあったのではないかという思いに襲われ、ただでさえ心が弱りやすくなっているのに、無意識に自分を責め、ダブルパンチになつてしまうのではないかと思う。

だからと言って人のせいにしても状況が打開

できるわけでもなく、結局は自分自身と起こったことを見つめて、一つ一つ冷静に対処して行くしかないのだが、そうした時に白洲正子の描きだす揺るぎない生き方をした人々の話にはとても力づけられる。「ブレない」というやや品のない、有体にいえばケチな言葉が立派な言葉のように横行している昨今、もつとどっしりとした、揺るぎない生き方で人生を貫いた人々のことを考えると、希望がわいてくる。

そう考えてみると、今の自分が最も影響を

与えてもらうべきなのは、あるいは自分の運命
と向かい合っている人にとって影響を与えても
らうべきなのは、白洲正子の一冊なのではない
かと思うのだった。

今私が影響を受けるべき一冊

<http://p.booklog.jp/book/46813>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46813>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46813>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.